The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国上海における国際理解教育に関する考察 : 中学生用教材と授業の分析を中心に
Author(s)	潜, 英峰; 義永, 美央子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2012, 16, p. 29-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第16号（2012）

中国上海における国際理解教育に関する考察[1]
― 中学生用教材と授業の分析を中心に ―

潘　英峰*・義永　美央子**

要　旨

国際化・グローバル化の進展にともない、中国の多文化的状況が加速度的に広まり、地域や学校の多文化化が進んでいる。こうした状況の中で、中国では、学校教育における国際理解教育の推進と国際理解教育に関する研究が一層重要視されるようになっている。本調査の目的は、中国・上海の中学校で使用している教材およびそれを用いた授業の分析を通して、上海の国際理解教育の現状や特徴を明らかにすることである。調査は2011年4月から6月、および、同年の11月から12月にかけて、中国で行った。現地で収集した資料とインタビュー調査のデータに基づき、上海の中学校の国際理解教育の目標・内容設定とユネスコの国際理解教育の目標・内容設定とを比較検討した。分析の結果、教材の内容設定については文化理解アプローチに重点をおきながら、関係発見アプローチや問題解決アプローチ、未来志向アプローチを併用していることが分かった。また、当該教材を利用した授業の特徴は1）マルチメディアの利用、2）生徒の特性に合わせたストーリーなどの語り、3）国際理解教育の中核的な内容（平和、環境保護など）への言及、4）情報化時代に合わせた教育内容の設定、5）生徒の感受性と知識の把握の両方に対する配慮、とまとめることができた。

【キーワード】中国上海、中学校、国際理解教育、教材分析、授業展開

1　問題提起

グローバル化の進展に伴い、国家間の交流が加速する中で、子どもに対する国際理解教育が学校教育の中で一層重要になっている。しかし、中国における国際理解教育の関連研究は揺籃期にあり、その概念及び内容構築についてはまだ充分な議論がなされていない。学校現場でもいわゆる受験勉強が中心である上、経済的な制限などの現実的な問題もあり、国際理解教育が展開できる学校は限られていることも事実である。しかし、2001年の中国教育部によるカリキュラム改革をきっかけに、国際理解教育の実践が各地方の学校で行われるようになりつつある。国際理解教育の教育目的や内容は実施される地方によって異なるが、国際化対応、異文化理解、平和教育など、いわゆる「国際意識の涵養」がその共通性ともいえる（姜, 2006：158）。

それでは、国際理解教育を実施している中国の学校では、どのような学習環境を整え、どのような教材を開発し、どのような指導方略のもとに授業を展開しているのであろうか。本稿では、国際化が急激に進展している中国沿海部の中でも特に経済の中心である上海市に注目し、公立中学校で使われている教材を中心にその内容を分析する。また、授業観察や教員へのインタビューに基づき、中学校での授業の実際についても検討する。

*大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程
**大阪大学国際教育交流センター准教授

2　中国における国際理解教育の位置づけ

2-1　ユネスコにおける国際理解教育の定義と目標設定

本節では、国際理解教育の歴史的背景と先行研究について概観し、本稿の視点も提示する。

国際理解教育とは「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育ならびに人権及び基本的自由に関する教育」（1974 年のユネスコ勧告による）である。「国際理解」「国際協力」「国際平和」と「人権」「基本的自由」を結合して「国際教育」としているが、これらの組み合わせの中で、国際理解教育の目標となる中心理念は、「人権」と「平和」である。ユネスコ成立（1946 年）当初はまだ、「国際理解教育」という名称が存在しない状況であったが、1974 年の「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び自由についての教育に関する勧告」の決議をきっかけとして、国際理解教育は大きな広がりと多様な形態をとるようになった。このユネスコの勧告は、国際理解教育の定義のみならず、教育目標も設定している。すなわち、1）平和を希求する人間の育成、2）人権意識の涵養、3）自国意識と国民の自覚の涵養、4）他国・他民族・他文化の理解の促進、5）国際的相互依存関係と世界の共通重要課題の認識に基づく世界連帯意識の形成、6）国際協調・国際協力への実践的態度の養成である。1）と 2）は国際理解教育の基盤であり、3）4）5）は教育の中心舞台であり、6）は教育の帰結という風に規定されている。この勧告は立場の異なる各国の多様な要求を可能な限り盛り込んだため網羅的ではあるが、さまざまな理念、目標、課題、方法等が混在しており、理論的な整備は不十分である。しかし、これは、国際教育・国際理解教育に関する唯一の国際公文書であり、ユネスコの国際理解教育の考え方を総括的にまとめたものとして重要な意味をもっているばかりでなく、国際理解教育の基本的フレームワークを示す原典としての価値は大きい（天野, 1993: 82-86）。

2-2　中国における国際理解教育に対する理論的検討と上海の「教育国際化」

近年、中国では国際理解教育に関する理論的研究の試みがなされるようになり、国際理解教育の概念について検討されている。徐ら（2003）は、国際理解教育は「国際理解」を教育理念とし、異なる文化背景、種族、宗教・信仰を持つ人々、異なる地域や国家の人々の相互寛容や理解を深め、人々の相互協力の能力を深め、グローバル社会で人類が共通に直面した問題を解決するための教育、そして、世界を理解すると同時に自らを理解し、世界の人々がお互いに協力しながら意識的に共同体を作るための教育である（p.85、日本語訳は姜（2007: 134）に基づき筆者が加筆）と定義した。一方、刘（2006）は、「国際理解教育とはある文化に属する人々に対する、さまざまな国家・文化及び国際組織に関する教育実践活動である。その教育は主に学校の教育カリキュラム、課程及び実践活動によって実践され、家庭文化やマスコミなどの社会教育手段で展開される。これらの教育を受けた生徒には、豊富かつ確実な国際知識を獲得し、より開かれ、平等で、互いを尊重し、寛容で、客観的な国際理解の態度と国際意識が育まれる。そして異なる文化を比較参照し、時代に応じた取捨選択を行う一方で伝統を維持する姿勢、及び、外国語の運用能力、異文化コミュニケーション能力が培われることで、民族精神、国際協力、国際責任感と国際意識をもつことができる。さらに、人類の利益、国際的観点から問題を考えさせ、国際社会を理解し、人類の多様な文化の共存、相互学習、人類社会の発展の促進を意識させる（p.17、筆者訳）」と定義した。また姜（2007）は、国際理解教育概念に関する研究や実践を概観し、中国で使われている国際理解教育の概念は主に 6 つの領域を内包していると指摘している。具体的には、1）「国際意識」の涵養、2）平和教育、3）国内少数民族文化の理解、4）海外に対する基礎知識や文化理解の方法、5）持続可能な発展についての教育、6）愛国教育、の 6 つの内容である（pp.134-135）。

このような国際理解教育の理念に関する検討と並行して、学校現場においても、国際理解教育が次第に重要視されるようになっている。2001 年に公表された義務教育カリキュラム改革案では、全国小中学校のカリキュラムを国家カリキュラム・地方カリキュラム・

学校カリキュラムの3段階に分け、地方や学校に一定のカリキュラム設定の自由度を与えた。この改革により各沿海地域では、国際化に向けて国際意識の涵養を目的とする国際理解教育を実施するようになった。特に北京市、上海市など急激に国際都市に成長した地域は国際化に伴う教育を行う必要性を強く感じていたため、いち早く国際理解教育を推進し始めた。また、各地方が当該地域の実情に合わせて国際理解を位置付けたのもその特徴といえる。例えば、北京では、国際都市を建設するためには、小中学生の道徳レベルを向上させ、北京のイメージアップを図る必要があるということで、礼儀教育やグローバルな視野の育成を重視した国際理解教育が展開されている。その一方上海市では、海外の技術や資本の導入、国際貿易の規模拡大、観光資源の開発などさまざまな社会的変化が起こり、上海市民の知識水準を高め、外国人とのコミュニケーション能力やビジネス能力を養成することが必要となった。そのため、上海市の国際理解教育では外国語教育や外国文化理解が強調されている（姜, 2007: 135-136)。

しかし、中国教育部が全国規模で国際理解教育に関する指針を公表したことはなく、地方毎にその理念や目標、内容構成が異なっている。例えば上海市では中国国家中長期教育改革と発展計画綱領（2010～2020）という政策に準じ、中国上海市の道徳教育に関する2つの綱領、即ち「民族精神文化教育実施綱領」と「生命健康教育実施綱領」を設定している。更に国際理解教育の推進に当たって、「教育国際化」のスローガンを提唱し、積極的に実践している（教育委員会国際理解教育担当主事へのインタビュー、2011/5/24)。「教育国際化」は主に、1）教育国際化の体系化、2）国際教育能力を有する本土教師の養成、3)教育国際交流という3つの項目で構成されている。具体的な内容は下記のようである（教育委員会国際理解教育担当主事へのインタビュー（2011/5/24)、および、教育委員会の内部資料による)。

1）教育国際化の体系化：教育の国際化を三つの段階に分ける。すなわち、外来文化を単に輸入する段階、バイリンガル教育を特色とする教育が生徒の対外交流を促進する段階、様々な文化や国際関係に関する生徒の理解を深化させる段階、の三つである。特に、個々の学校が国際理解教育を実施することで、学生の国際的な視野と国際理解能力の涵養に積極的な役割を果たし、さらに、全体的な教育国際化水準の向上を牽引する。また、中外交流や多文化共生とそれに関する理解の促進を目指し、中国語国際教育センターが設立されている。

2）国際教育能力を有する本土教師の養成：英語教諭、高級英語教諭[2]、バイリンガル教諭、外国語としての中国語教諭の養成と管理に力を入れており、留学経験者、国内専門機関の専門家、外国人専門家、国内の専門家をそれぞれ招聘した4つの養成コースが展開されている。そして、外国語学校が計25校あり、目標言語のオーセンティック教材や学校が独自に編集・開発した教材による教育が実施されている。更に、校長や教員を3～5ヶ月の間にわたりアメリカ、オーストラリア、イギリスの専門家養成コースに派遣し、国際交流能力の育成を図っている。

3）教育国際交流：国際友好学校の建設を中心とする国際教育交流項目が増加傾向にあり、個々の学校単位での取り組みから、地域を巻き込んだ活動へと拡張している。具体的な活動項目は、「中米高校生交換」、「中日の特殊教育交流」などである。また、生涯学習と学習型社会[3]に関する国際シンポジウム、例えば、「中英名校長論壇」「国際学校世界教育連盟大会」、「国際教師検討会」などを開くことで、国際教育文化交流の基礎を固めるとともに、交流の多様化を図っている。さらに、多元文化融合と理解のための国際バカロレア課程（IB課程）と帰国子女のための課程も開設されている。

そして、「教育国際化」を具体化した教育として、国際理解教育が行われている。まず、国際理解教育の実施と内容について概況してみると、主に5つの内容がある。すなわち、1）国際理解教育の媒介としての課程とカリキュラムの開発、2）国際理解教育の基盤としての自民族文化の肯定と学習、3）国際理解教育の触媒としての学校内における特色のある活動の展開、4）国際理解教育実施の保障としての国際教育能

力を有する教師の養成、5）国際理解教育を本格化する国家間での学校の相互訪問と交流、である（教育委員会国際理解教育担当主事へのインタビュー（2011/5/24）と内部資料からの引用）。

天城（1993: 9）は教育の国際化は二つの内容で構成されると指摘する。一つは、教育の国際化を図るための政策、制度ないしはプログラムであり、いま一つは、国際化への教育を実践するための目的、目標、方法である。一般に、教育の国際化を論ずる場合、1のプログラムや制度が強調され、2の目標、方法は1の制度に即して取り上げられ、1の制度がなければ2の目標は遂げられないことが強調されている。上海市においては、上記で言及した政策の下に、国際理解教育が学校ごとの需要や特徴に応じて行われている。

以上を踏まえ、本稿は、上海市の公立中学校で使われている教材について分析し、参与観察の手法を用いて観察した実際の授業の展開の仕方についても検討することで、上海市の国際理解教育の現状をまとめ、その特徴と今後の課題を見出すことを目的とする。

3　調査の概要

2011年4月23日から2011年6月10まで、および、同年の11月2日から12月10日までの2回に分けて中国上海市に赴き、現地での資料収集とインタビュー調査を行った。インタビュー対象者は、教育委員会の先生2名、校長先生1名、副校長先生1名、中学校の国際理解教育担当の先生3名、中学校の英語の先生3名、中学生12名の、計22名である。また、教育委員会と小中学校が独自に開発した国際理解教育教材や関連資料を収集した。更に、参与観察の手法を用い、上記の教材を使って上海市の公立中学校で実施された国際理解教育の授業も観察した。次節では、国際理解教育の教材と実際に観察した授業について詳しく検討する。

4　教材分析と国際理解教育の授業展開

まず、調査を実施した地域の国際理解教育の状況について、教育委員会の先生へのインタビュー調査の結果に基づき概観する。上海市の中でも国際理解教育の普及には地域差があり、特にX区[4]が国際理解教育を重視している。上海市X区における国際理解教育は、12の実験校を主として実施されている。主に3種類、すなわち、外国語学校、国際部がある学校、市或いは区の重点学校[5]が実験校を構成する中核となっている。この3種類の学校が国際理解教育の実験校に選定されている理由としては、まず、外国語学校ではバイリンガル教育が行われていることがあげられる。次に、国際部が設置されている学校であるが、これらの学校は立地地域の特性上、外国人生徒が多数在籍するため、国際課程の増設が喫緊の課題となっている。最後に、重点学校では課外活動が非常に盛んである。例えば、ある全国重点の中学校では、模擬国連クラブが設置されている。政治、気候、戦争などに関するディスカッションが活発に行われ、世界中学生模擬国連コンテストで受賞したこともある。このような特徴を有する3種類・12の学校が現在の上海における国際理解教育の中核となっている。今後はこの12校のみならず、徐々にその他の学校へも普及していくことが大きな課題である。

また、X区は『世紀名片 国際理解教育シリーズ読本』（2010、上海教育出版社）という、中学生、高校生、市民向けの3冊の国際理解教育シリーズ読本を出版している。この3冊の本は分かりやすい内容で、百科事典のように各国の文化を紹介している。この3冊の出版は上海で初めての試みで、児童生徒や市民の異文化理解の促進を目指している。このようなモデル教材があることで、国際理解教育を展開しようとする学校は新たに教材開発をせずとも、この教材をベースにして、学校独自の教育を実施することができるわけである（教育委員会国際理解教育担当主事へのインタビュー、2011/5/24）。

以下、『世紀名片 国際理解教育シリーズ読本』（2010、上海教育出版社）の概要について紹介する。このシリーズは、上海万博の開幕をきっかけとして、「教育国際化」の推進や市民と青少年の国際意識の涵養を目指し、2008年8月から企画が開始された。上

海市の教育者達は「教育国際化」の推進につれ、単に国内と海外を往き来するだけでは十分でなく、それぞれの国がそれぞれに深い文化を内包することへの理解が重要だと強く意識するようになった（教育委員会の先生へのインタビュー、2011/5/14）。多様な文化に対する理解と寛容、融合を現代の世界を知るひとつの鍵と捉える立場から、全シリーズは「理解」をキーワードにし、「人類間」、「国際間」、「人類と自然間」の理解を図ることが読本の趣旨となっている。教材の全体的な内容は、地域文化を中心円にして、中国文化、世界文化へと拡張していき、「何かを考えよう」「行動せよ」「名人名言」というプラスαの項目を設けた。

シリーズ3冊のうち、高校版読本は主に1）経済競争の中で誰が勝つのか、2）どうすれば環境と共存することができるか、3）文化はなぜ人類共同の精神的な家と言えるのか、4）変化しつつある国際社会の新態勢をどのように認識するか、5）命の意義はどのように表現できるか、という5つの主題から成り立っている。（中学版読本も5つの主題で構成されているが、これについては次節で詳述する）。そして、市民読本は主に「地球村」、「世界公民」、「尊重」、「発展」、「協力」、「共存」、「貢献」という主題で構成されている。

4-1　教材の目標体系の検討と内容の紹介

本節では、前述したシリーズ読本の一冊『世紀名片 国際理解教育初中生読本』に焦点を当て、教育目標と内容、および、教材の活用方法を中心に分析する。表1は、ユネスコが提唱する国際理解教育の目標と、本教材の目標を比較してまとめたものである。両者には共通点が多いが、情報化社会などの項目が本教材で新しく追加されている。

続いて教材の内容をみると、5章から構成されており、それぞれの章に課題と学習ポイントが明記されている（表2）。なお、表2の「展開」とは、この教材を用いた教育実践において、さらに発展的な活動が考えられる話題などを筆者が考察してまとめたものである。

表1　教材の目標体系とユネスコの比較

	ユネスコ	教材
教育目標	〈人権の尊重〉人間の尊厳、平等、相互の尊重など。 〈他国文化の理解〉諸国民同士の相互理解、世界文化の多様性、価値観の多様性、寛容の態度、共感的態度、国民的自覚や愛国心の育成など。 〈世界連帯意識の育成〉環境、資源などの地球問題への関心と認識、相互依存性への理解、国際協力意識など。	〈価値観、態度目標〉地球上の多様な価値や文化を理解し、公正で平和な世界をつくろうとする市民的資質など。 〈知識的なもの〉多元文化、地球問題、情報化社会、世界政治経済など。 〈技能と実践的なもの〉交流と対話能力、未来への認識とつながり。

表2　教材の内容構成とその拡張内容

構成	課題	学習ポイント（抜粋）	展開
1．世界は「平ら」になった	1．地球村時代に入る 2．国際社会新態勢 3．インターネットが世界を変える	・英米の学生のしつけの紹介、『ハリー・ポッター』、ヒップホップの紹介 ・地球村、国際団地の由来、国際理解教育・国連について ・Eビジネス、ITS、インターネットの普及	・各国の学生のしつけの紹介、世界で流行している書物、芸術文化など ・国際理解教育・国連に関する知識 ・デジタル世界、情報化時代、インターネット
2．共同の家	1．地球との緊密な関係 2．地球温暖化の警告 3．資源の限界 4．我々はボランティアである	・UFO ・地球上にどれくらいの生物がいるか ・危機に瀕する動物 ・北極の氷が溶けた ・『京都議定書』 ・石油の重要性 ・フィンランドのソーラ町 ・CCS技術	・世界中の「奇観」：隕石の謎など ・自然界の生態調査 ・危機に瀕する動物と地球環境の関係発見 ・世界中の環境対策 ・世界中の新しい資源の開発 ・環境保護のための実践

3．文明の検証	1．多様な文明 2．平和の希求 3．命をさらに輝かせよう 4．対話とコミュニケーション	・『ホーマーの史詩』、マヤ人の数学 ・化学兵器の危害 ・世界平和の日、世界禁煙の日 ・オリンピック精神、漫画	・古代文明と歴史の学習 ・核、バイオ科学、麻薬の危害 ・各国禁煙の措置 ・国境を超える音楽、芸術、体育を楽しむ
4．協力と発展	1．持続的な発展 2．協力が共栄になる 3．ソフトパワーの競争	・西洋のファストフード ・20 世紀の新製品 ・グローバル化と貧富の差 ・ヨーロッパ連合 ・儀礼を軽視できない	・グローバル化に伴う発展の勢いと意義 ・国際化における「協力」の重要性 ・文化の重要性
5．共に平和社会を造ろう	1．発展中の中国 2．世界を愛で満たそう 3．共同の未来のために	・周恩来、鄧小平 ・世界各地のチャイナタウン ・ユニセフ ・母の日 ・9・11事件 ・四川大地震の救援活動	・中国および世界の発展に貢献した人物 ・世界中の公益事業の状況 ・発展に伴う危機の認識

4-2　教材内容の活用と授業展開の仕方

本節では、『世紀名片 国際理解教育初中生読本』を活用した授業において、国際理解教育はどういった形で実現されていたのかについて検討する。ここでは2つの国際理解教育の授業をモデル事例として取り上げ、インタビューデータや現地で収集した資料も適宜引用しながら分析する。また、授業の特徴や、教材設定のアプローチについても考察する。

4-2-1　国際理解教育の授業その1：心の中の平和の鳩を飛ばせよう—国際平和の日をめぐって

『世紀名片 国際理解教育初中生読本』の中で、平和に関する内容は計11の事例とデータで扱われている。具体的には、戦争に伴う人的、経済的な損失、『化学兵器禁止条約』の成立、核兵器の脅威、戦争の被害者から平和友好大使になるベトナムの潘金福のストーリー、『世界平和の日』の由来、などである。

本節で取り上げる授業は中学1年生（1クラスは約40名）を対象とし、『世界平和の日』に焦点を当て、「心の中の平和の鳩を飛ばそう—国際平和の日をめぐって」というテーマを中心に展開された。

【授業の導入】

先生：「何の映像を見ましたか？」（PPTで映像を見せながら、生徒に聞く）

生徒1：「鳩です。」

生徒2：「鳩が緑色の木の枝をくわえています。」

先生：「では、緑色の木の枝は何を象徴しますか？」

生徒3：「知っています。それは、平和を象徴します。」

先生：「正解！では、その由来について知っていますか？知りたいですか？」

生徒（ほぼ全員）：「知りたいです。」

先生：「じゃ、静かにして。話を始めますよ。」

そして、先生は「ノアの方舟」のストーリーを語り始めた。生徒達は興味津々で聞いていた。ストーリーを語り終えて、先生は「平和についてあなたはどう思いますか？」と生徒に問いかけた。

生徒4：「友達と仲良く遊べることです。」

生徒5：「戦争がないことです。」

（S中学校におけるフィールドノーツ、2011/11/8、中国語で行われたやりとりを筆者が日本語訳、以下同様）

先生は映像を見せた後ストーリーを語る形で「平和」という授業のキーワードを導入し、生徒達の好奇心を自然に喚起している。そして、生徒達を考えさせ、更に、生徒の解答から続きの授業の内容—「戦争」を引き出している。

【授業の中核的内容】

先生：「平和についてみんなは自分なりの理解があると思います。では、世界中の子ども達は我々のような安定した生活を送っていますか？」

生徒6：「違います。ニュースで見ました。戦争しているところでは、子どもは学校にも行けなくて、孤児になる子もいます。」

先生：「そうです。じゃ、戦争は一体人々に何をもたらしましたか？」

そして、戦地を逃げ惑う人びとの映像などを流した。さらに、戦争が人々にどのような苦痛を与えたのかについて一問一答の形式で議論した（S中学校におけるフィールドノーツ、2011/11/8）。

戦争の映像に関する議論が約10分間続いた。生徒達が「子供がお父さんと一緒に逃げている」、「小さい女の子はその時何を考えていたのかな」、「彼女は怖がっているみたいで、しっかりと大人の衣服を掴んでいた」、「彼は病院にいる。鼻にチューブが入っている」など映像に関する観察や感想を述べた後、本題の「戦争は一体人々に何をもたらしたか？」という議論に入った。

「死です」、「子供が帰るところがなくなり、孤児になります」、「学校に行けなくなり、祖国と離れてしまいます」などの答えが生徒から出た。そして先生は「そうです。戦争は我々を故郷から離れさせ、多大な苦痛を与えます。人々が戦争の犠牲になります。だから世界中の人々は戦争に反対し、平和を望んでいます」とまとめて結論を出した。

続いて、マイケル・ジャクソンの「We are the world」の歌の映像を流した。「一番印象に残るものをメモしてね」という先生の指示もあった。

映像が終わると、生徒達は続々と発言し始めた。「兵士が銃を下ろしたことで、戦争が終わったことを示しています」、「女の子は花を兵士に捧げて、戦争はいらないと表しています」、「みんながキャンドルを燃やして、平和を願う画面が一番印象的です」など各々に感想を言った（S中学校におけるフィールドノーツ、2011/11/8）。

ここまでの授業の進行で、生徒達は平和の由来から、自分なりの平和像、戦争と災害、平和に対する希望という過程を経て戦争と平和について理解を深めた。映像や教師の解説などを通じ、生徒達の「戦争に反対して、平和を維持しよう」という共感を引き起こしている。

【授業のまとめ】

授業のまとめとして、平和の願いをこめたカード作りを実施した。先生が事前に用意した鳩の切り紙を生徒達に渡した。平和への願いの言葉を書かせ、クラスメートの前で読むことを指示した。

「戦争がないことを願っています」、「世界中の子どもが我々のように幸せに暮らすことを願っています」、「人類が永遠に平和であることを願っています」など互いに自分の願いを発表した。

最後に、学習ポイントである「国際平和の日」についての学習も行った。「毎年9月21日は国際平和の日です。ロゴマークと平和を示す旗もあります」というような先生の説明がメインで進行し、生徒達は静かに聞いていた（S中学校におけるフィールドノーツ、2011/11/8）。

表3は、授業の各段階のねらい、授業実施のプロセスと期待される効果について、S中学校の国際理解教育担当教諭へのインタビュー（2011/5/28、11/14）に基づいてまとめたものである。

また、全体的な授業の特徴については下記のようにまとめることができる。

1）導入：映像とストーリーの語りで始まる授業が生徒の好奇心を喚起し、教育内容を自然に導入できた。

2）中核的内容：抽象的なテーマではなく身近なことから平和を考えることで、生徒が受け入れやすくなる。また、生徒の議論をメインにすることで生徒の授業参加度が高まるとともに、学習内容に対する理解をさらに深めることができる。

3）まとめ：生徒の共感を引き出した後、自分が望ましいと思う平和の状況を考えさせる時間が与えられる。願いをかけるカード作りの活動を通して、生徒たちは平和であるからこそ、世界はもっと美しくなるというような信念を確信することができた。

4）学習ポイントの学習：授業の前半の活動が授業の後半の抽象的な知識を学習するための基礎になった

と言える。そうすることで、生徒たちは抽象的な知識をより効果的に学習できる。

表3　授業の各段階のねらい、授業実施のプロセスと期待される効果

授業の各段階のねらい	授業実施のプロセス	期待される効果
①授業の導入：平和の鳩とカンランの枝というシンボル、平和と災害に対する認識	・PPTで平和の鳩の映像を見せる。映像を見ながら、一問一答の形式で始める。 ・背景紹介：平和の鳩とカンランの枝の由来。	・映像：生徒の好奇心を引き起こさせる。 ・ストーリーの語り：平和の象徴としての鳩について理解させる。
②授業の中核的内容：平和と戦争に関する理解	・平和について話す。 ・戦争の映像を流す。 ・「平和とは何か」と「戦争が人々に与える苦痛」という2つのトピックについて議論する。	・平和と同時に戦争を認識させる。 ・生徒達から、戦争に反対し、平和を守ろうという共感を引き出す。
③授業のまとめ：平和の願いをこめたカード作り	・平和の願いを考えさせる。 ・切り紙の平和の鳩と作らせる。願いをカードに書き、みんなの前で読ませる。	・授業内容を振り返る。 ・平和の願いをこめたカード作りは平和の日の活動に参加する第一歩の実践となる。
④授業の学習ポイントの学習：『国際平和の日』	・『世界平和の日』の由来と設立の趣旨の解釈。 ・2002年の平和の日の記念日に関する紹介。	・『世界平和の日』の学習ポイントを把握させる。

担当教師の丹念な準備と工夫により、授業は全体として非常にスムーズに進行した。しかし生徒に教師の伝えようとする意図が本当に伝わったかどうか、的確に理解したかどうかに関する評価や検証は行われていない。例えば、戦争について理解させるために実際の戦争の映像を見せているが、生徒にとって戦争は自らの生活世界とほど遠いことであるため、戦争の悲惨や苦痛などについて実際に理解できるのか、難しいところである。また、授業中に生徒達は「戦争への抵抗、平和への願い」を強く表していたが、授業の後でもそういう意識を授業中と変わらず維持しているかどうかも判断しにくい。この点については授業後の、あるいは授業以外の生徒の生活をさらに観察し、検討すべきところではないかと思われる。

4-2-2　国際理解教育の授業その2：中国における危機に瀕する動物に関する探究

教材の中で、危機に瀕する動物に関する内容はそれほど多くなく、「野生動物のために道路をつくって橋をかける」、「小鳥に世界チャンピオンを捧げる」、「後ろから3個目の墓碑」の3つの文章のみである。以下、それぞれの内容を概観する。

【野生動物のために道路をつくって橋をかける】

カナダの国立公園の中には、野生動物の専用通路と橋がよくみられる。環境エンジニアはこれらの道路を「野獣道」と呼ぶ。野獣道は大型動物達が季節に伴う移動や食事を探すためによく利用している。世界中の多くの国家がこうした「野獣道」を作っている。例えば、「鳥道」（オーストラリア）、「カモシカ道」（中国）、「象道」（南アフリカ）、「蛇道」（アメリカ）等である。もちろん、動物達は人間のように「交通ルール」を守れるわけではないので、野獣道を通過する人々の方が減速する、あるいは回り道するように指示した道路標識が設置されることもある。

【小鳥に世界チャンピオンを捧げる】

2002年1月にオーストラリアでテニスの試合が開催された。試合中、上空から飛んできた小鳥がちょうど選手の打ったボールに命中した。選手は地面に落ちた小鳥をみると、すぐラケットを捨てて小鳥の墜落したところまで走り、手で十字を切って不幸にも死んでしまった小鳥のために最後の祝福を送った。また審判は小鳥をハンカチで包み、コートの外に運んで再び試合に戻った。これらの様子は、全世界の観衆を驚かせた。偉大な選手の心の中で、小鳥の命の価値は世界チャンピオンの賞杯より高いのである。

【後ろから3個目の墓碑】

1998年、北京郊外において特別な墓地―「絶滅した動物墓地」が建設された。計176個の石板で製作された墓碑は産業革命以降に絶滅した、あるいは危機に瀕する動物を代表しており、それぞれに動物の名前と絶滅した時期を刻んでいる。墓碑はドミノの方式で

配列され、145 個の墓碑は既に倒れており、それ以降は倒れそうであるが倒れていない墓碑である。そして、立っている 30 個の墓碑の中で、後ろから 3 番目は「人類」である。この墓地は人類に警告を出している：自然を保護しよう！生物の多様性を保護しよう！176 個のドミノが次から次へと倒れるときに、人類だけが運よく免れることができるのか？（『世紀名片 国際理解教育初中生読本』 pp.96～98 の内容によるまとめ、筆者訳）

これらの内容に関連する国際理解教育の授業は、教材を使う場合、文章の朗読や文章の理解などが中核的な内容になるかもしれない。しかし、S 中学校で行われた授業では、危機に瀕する動物の課題を授業の中核的な内容とするが、自然界の危機を生徒達に認識させるほか、生徒の情報収集や資料処理の能力を高めることも教育の目標に入れた（S 中学校国際理解教育担当教諭へのインタビューによる抜粋、2011/12/2）。続いて、授業の具体的な展開について記述する。

【授業の目的】

「中国における危機に瀕する動物に関する探究」というテーマの授業の目的は、生徒の生態保護、動物保護の意識、および、情報収集、資料処理の能力を高めることである。これらの能力は情報技術時代の要請を受けた教育目標の 1 つでもある。

具体的には、1）生徒をグループに分け、興味がある危機に瀕する動物を研究するという実践を通して、生徒の情報処理能力を高め、2）資料収集、資料整理及び内容発表などの活動を通して、情報処理技術への注目から資料内容理解に至るプロセスで、危機に瀕する動物の概念や絶滅の原因などを把握させ、危機に瀕する動物保護の方法や如何に動物と仲良く暮らせるかなどを考えさせることで、国際理解教育の教育目標を達成する（S 中学校国際理解教育担当教諭へのインタビューによる抜粋、2011/12/2）。

生徒は放課後にも準備するため、授業は 2 コマに分けて実施された。1 コマは全体的な流れと資料収集の内容と方法などについての説明であり、もう 1 コマは整理した情報の発表やグループ間の質疑応答である。

【授業の進行】（1 コマ目）

1）導入とグループ分け

授業の始めに、教師はテープ音声を流した。「恐竜時代には、平均で 1000 年ごとに一種の動物が絶滅した。20 世紀に入って、4 年ごとに一種の動物が絶滅した。最近の 50 年間には、約 40 種の生物が絶滅した…」。音声の後、生徒の感想を聞いた。感想を述べている間に、自然に「絶滅危惧種」の概念が引き出された。そして、生徒達が知っている、絶滅したあるいは絶滅危惧種の動物の名前を言わせた。

生徒 1：「コウノトリが少なくなったことを聞きました」。

生徒 2：「白稽豚[6]」。

生徒 3：「鯨類も少なくなっているそうです」。

これらの生徒の発言に基づき、同じ種類の動物に興味関心を持っている生徒を 11 グループ（10 組は 4 人、1 組は 3 人）に分け、活動しやすいように座席を移動した。そして、各グループが調べる動物を決定し、教師が資料収集の内容について説明した（S 中学校におけるフィールドノーツ、2011/12/2）。

2）資料収集の内容の提示と方法の説明：

教師は資料を収集し、主に下記の内容を中心に調査することを指示した。具体的な調査の内容は、1）現存する数、2）特性、3）食べ物、4）生活習慣、5）絶滅に瀕する原因、6）保護の方法、という 6 つの項目である。

どのようにして資料を収集するかは生徒との話し合いで決定された。生徒は普段よく使う情報検索の手段や聞いたことのある方式などを次々に回答した。最終的に決まった方法は、1）インターネット検索、2）書籍、3）聞き取り、4）マスコミ・メディア（テレビ、ラジオなど）、5）新聞・雑誌、6）現地調査である。各グループは各自の状況を判断し、具体的な調査の方法を決める。さらに、グループ内のメンバーで各々

の調べる内容を分担した（S 中学校におけるフィールドノーツによるまとめ、2011/12/2）。

【授業の進行】（2 コマ目）

1）資料のまとめ

グループのメンバーが各自で収集した資料を持ってきて、グループ内の話し合いの形で資料をまとめる時間を与えた。

2）内容の発表と質疑応答：

グループの代表がまとめた内容を発表した。1 グループの発表は 5 分以内で、発表後最大 3 つの質問が受けられると設定した。生徒達は積極的に自分の研究成果を発表しようとしていた。最も盛り上がったのは、各グループがどれだけ真剣に準備したかが試される質疑応答の部分であった。うまく発表した生徒あるいはよく答えた生徒の満足した様子や、同じグループのメンバーが回答できなかったり、回答が十分でなかったりした時の助け合いの様子などから、生徒たちの緊張感と達成感が窺えた（S 中学校におけるフィールドノーツによるまとめ、2011/12/2）。

「中国における危機に瀕する動物に関する探究」というテーマの授業は、環境保護意識と情報収集処理能力の向上を目標としている。グループごとの資料収集、まとめ、発表という形で学習が進行する中で、絶滅危惧種に関する理解が深まるだけでなく、グループ間の助け合い、互いの協力の重要性も実感されたといえる。こうした相互協力の姿勢は、現在の「一人っ子」の環境で育つ中国の子どもにとっては学校教育の中で育むべき重要な資質であろう。また、「協力」というキーワードは国際理解教育の観点からも非常に重要であり、本稿で言及した教材においても「未来へとつながる」重要なポイントとされている。今回の授業においては、相互扶助の精神を生徒に感じさせることが最も大きな収穫となったのではないかと思われる。

5　まとめと今後の課題

本稿では、インタビューデータと現地で収集した文献資料、授業観察に基づき、中国上海市の国際理解教育の目標・内容設定とユネスコの目標・内容設定とを比較検討した上で、国際理解教育の授業の実際の展開についても考察した。

大津（2004）は高等学校での国際理解教育実践に関する年間カリキュラムの構想において、「文化理解アプローチ」「問題解決アプローチ」「関係発見アプローチ」「未来志向アプローチ」の 4 つを設定している（p.139）。本稿で取り上げた『世紀名片 国際理解教育初中生読本』の場合、世界中のさまざまな国家の文化、慣習、事情の紹介などを行っていることから、文化理解アプローチに重点をおいている。また、危惧種などの課題に関連して、気候や環境との関連から、問題を解決する方法を探る学習を設計しており、関係発見アプローチ、問題解決アプローチも併用したと言えよう。さらに、「共同の未来のために」といった内容が設定されていることから、未来志向アプローチも採用していることが窺える。

一方、各学校での国際理解教育の実践では、教材の内容をベースにして、学校の教育環境や特色などに配慮した上で、担当教師がさまざまに工夫した授業を展開していることが明らかになった。授業の特徴としては、1）マルチメディアの利用、2）生徒の特性に合わせたストーリーなどの語り、3）国際理解教育の中核的な内容（平和、環境保護など）の選択、4）情報化時代に合わせた教育内容の設定、5）生徒の感受性と知識の両方に対する配慮、という 5 つの項目で整理することができる。

しかし、国際理解教育の実施においてはいくつかの問題も残っている。例えば、地域で統一した教材を使用するため、個々に教材を開発する労力は軽減されるものの、個別の学校の現状に合わせた配慮が少なく、実践を行う教師の工夫が必要とされること、学校における国際交流や総合学習の時間的な制約、生徒の生活とかけ離れた内容に関する理解の的確性の把握の難しさ、などである。理論的探究と教育実践、双方の蓄積により、これらの問題に対処していくことが今後の上海市における国際理解教育の課題と言えよう。

注

1. 本稿は博報財団「第6回児童教育実践についての研究助成事業」によって実施された「中学生の国際理解意識に関する比較研究－日・中・米を対象として－（研究代表者：義永美央子、共同研究者：潘英峰、中橋真穂）」の研究成果の一部である。また調査の実施にあたって、平成23年度大阪大学研究支援員制度の支援を受けた。
2. 主に小、中学校の教師の最高位の職名である。高級教師資格の評定は、「中華人民共和国教師法」、「高等学校教師職務試行条例」および各地の職名に関連する政策に則って、教師を総合的に評価して決定される。評定の目的は、教員の業務の改革、教師の能力の向上、そして、教育事業の発展の推進であり、基礎教育の質を高める基盤の一つとなっている。
3. 「学習社会論」は1968年にアメリカの学者ロバート・ハッチンスによって提唱された。ユネスコの国際教育開発国際委員会は、1972年に『存在のための教育（Learning to Be)』と題する報告書を発表した。委員長の名を冠して通称『フォール・レポート』とも呼ばれるこの報告書では、未来の教育の目標として生涯教育と学習型社会の2つの概念が特に強調されている。中国の場合、「中華人民共和国中国共産党第十六回人民委員会代表大会報告」において、「全民衆の学習、生涯学習の学習型社会を建設し、人の全面的発達を促進しよう」と提唱している。
4. 現地の関係者より地域の特定は避けてほしいという要望があったため、地域名は伏せる。
5. 重点学校は中国の教育制度の一つである。学校の成績、規模などに従って、区重点学校、市重点学校、全国重点学校の名誉的な名付けをする。重点学校の中でも、全国重点はどの側面からみても特に優れた評価を受ける学校とされる。
6. 揚子江等に生息する白いイルカのような姿をした生き物。絶滅が危惧されている。

参考文献（アルファベット順）

天城勲(1993)「わが国の国際化―教育を中心として」『国際理解教育』第1号, pp.2-10.

天野正治(1993)「国際理解教育の現状と実践上の課題」『国際理解教育』第1号, pp.72-97.

姜英敏(2006)「中国の小中学校における国際理解教育の動向」『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究』平成15・16・17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書,研究代表者：多田幸治, pp.158-166.

姜英敏(2007)「アジアにおける国際理解教育の現状と研究ネットワーク構築の可能性―中国の視点から―」『国際理解教育』第13号, pp.134-137.

刘洪文(2006)「国际理解教育的定义内涵初探」『江西青年职业学院学报』第16巻, 第2期, pp.16-18.

马丽(2001)「外语教学中的国际理解教育」『北京教育学院学报』第4号, pp.45-47.

大津和子(2004)「総合学習における国際理解教育のカリキュラム構想」『国際理解教育』第10号, pp.133-146.

大津和子(2010)「国際理解教育の目標と内容構成」『グローバル時代の国際理解教育―実践と理論をつなぐ―』明石書店, pp.28-39.

徐辉・王静(2003)「国际理解教育研究」『西南师范大学学报哲学社会科学版』第29巻, 第6期, pp.85-89.